

統計で見る貿易の変遷

貿易は、日本の産業を発展させ、国民生活を豊かにする大きな原動力であり、貿易の発展とともに日本は様々な面において進歩をとげてきました。

日本の貿易構造の推移を貿易統計から振り返り、その変化が国民生活に与えた影響について、時代背景や産業構造の変化を踏まえ見ていきます。

明治 大正 昭和初期

産業革命

繊維産業の発展による

明治初期の日本の主な輸出品目は生糸、茶、水産物、主な輸入品目は綿織物、毛織物、砂糖、鉄類でした。特に生糸は、絹織物を含め輸出額全体の約4割を占めていました。当時、絹は欧米で贅沢品でしたが、富岡製糸場を中心に製造した良質で安価な生糸を輸出することで、絹が幅広い階層の人に使用されるようになりました。また、富岡製糸場には、全国からの工女募集・技術を学んだ工女による地方への技術伝播という役割があり、女性活躍社会の先駆けという側面もありました。

明治中期になると、輸入した実綿や繰綿から生産した綿織糸や綿織物などの輸出が増え、綿織物は昭和初期には輸出額全体の約2割になりました。蒸気機関を利用した紡績機により綿糸を大量生産できるようになり、大量の綿製品を生産・輸出することで、軽工業分野で産業革命が進み、貿易立国としての礎を築きました。



輸出生糸の船積状況(昭和初期)



「原 富岡製糸所 繰糸部ノ一部」(提供:富岡市)

主な輸出品目の変遷と国民生活の変化

ハイテク産業の時代

重化学工業

昭和中期 後期

昭和20(1945)年の日本の輸出入額は約13億円でしたが、戦後の民間貿易再開に加え、昭和23(1948)年にGATTが発足したこともあって、貿易が拡大し、昭和30(1955)年には約1.6兆円となりました。特に貿易構造については、原油・鉄鉱石を輸入し鉄鋼などの重工業製品や自動車などのハイテク製品を輸出するものへとシフトし、石油コンビナートの建設、新幹線の開業など、日本の産業構造も変化しました。昭和後期には、自動車や家電・コンピュータなどのハイテク機器が輸出の中心となり、米国との貿易摩擦を背景に繊維製品の輸出割合は下がっていきました。高品質な日本の自動車は、外国での需要が拡大し、昭和52(1977)年に輸出額全体に占める割合が第1位となり、今日まで輸出の柱となっています。また、昭和末期には半導体の輸出も目立ち始め、昭和63(1988)年には自動車、鉄鋼に次ぐ輸出割合となり、日本の半導体産業は世界の50%を超えるシェアへ成長しました。



自動車の船積状況

平成 令和

半導体需要の増加

IT社会の発展に伴う

平成になっても自動車、半導体、鉄鋼が引き続き日本の主要な輸出品目となっています。自動車輸出をめぐる米国との貿易摩擦の影響により、自動車の現地生産化が進められ、平成初期には自動車の部分品の輸出が増加しました。また、インターネットの普及など、ICT産業の発展に伴う半導体の世界的な需要増を背景に、半導体は主要な輸出品目となっています。他方、繊維製品は、海外生産を主軸とするアパレルメーカーの台頭により、アジア諸国から衣類として輸入され、原油に次ぐ輸入品目となりました。

平成初期の携帯電話は国産が主流でしたが、平成後期には、スマートフォンが世界的に普及し、韓国や中国からの輸入が増加しました。また、中国が半導体の製造に力を入れ始めたことなどを背景に、半導体製造用の機械の輸出がアジア向けを中心に増加し、日本の主要な輸出品目となっています。

近年、特に新型コロナウイルス感染症の流行に見舞われた令和2(2020)年においては、経済活動や物流の停滞などにより自動車の輸出や原油などの輸入が大幅に減少し、輸出入額は対前年比で10%以上減少しましたが、マスク着用やテレワーク推進などの感染拡大抑制の取組により、マスクやパソコンの輸入が増えるなど、当時の社会情勢が現れています。

50
おわりに

このように、貿易構造と産業構造は密接な関係にあり、その変化は日本の経済及び国民生活の発展に大きく関わってきたことがわかります。貿易統計は、国際経済や日本のサプライチェーンを把握するための重要な資料として、国内外問わず多くの方に利用されており、これから日本の経済や生活がどのように変わっていくのかを読み解くカギとなるため、今後もその動向には注目していく必要があります。



衣類の検査(編み方を顕微鏡で確認)

参考文献等

- 群馬県立世界遺産センター「富岡製糸場と絹産業遺産群」ホームページ (<https://worldheritage.pref.gunma.jp/whc/>)
- 富岡市観光協会「世界遺産 富岡製糸場」ホームページ (<https://www.tomioka-silk.jp/tomioka-silk-mill/>)
- 上武絹の道運営協議会「上武絹の道」ホームページ (<https://www.jobu-kinunomichi.jp/management/>)
- 経済産業省「半導体戦略(概略)2021年6月」(<https://www.meti.go.jp/press/2021/06/20210604008/20210603008-4.pdf>)

コラム 貿易統計の歴史

貿易統計は、明治2(1869)年、外務省が税関(当時は運上所)に対して、年2回開港場の貿易額の報告を求め、『各開港場輸出入物品高』として公表したのが始まりで、政府が作成する統計で最も古い歴史を有しています。

明治7(1874)年には、大蔵省名義で、『大日本各港輸出入年表』として一般に発表することになり、その後も各時代の経済情勢を反映してきました。当初は年2回程度作成され、紙媒体でのみの閲覧でしたが、現在では毎月インターネット上で誰もが自由に閲覧できます。



明治2年「各開港場輸出入物品高」(出典:国立国会図書館)



統計課執務風景(昭和初期、神戸税関)